

# 英国の産業革命による世の中の変化と

## それに警鐘を鳴らした人々

鈴木 真紀

### 1. 序文

この研究ノートは、2006年から2009年にかけて、英国公認観光ガイドとして口述した内容をまとめたものである。具体的には、「ウィリアム・モリスツアー」、「ボーイスカウト100周年記念ツアー」、「経団連関西支部視察ツアー」、東京で行なった、「ウィリアム・モリスについての講演」等が含まれている。

まず、産業革命が成し遂げたこと、それによってもたらされた効果と弊害について記す。その後、産業革命による世の中の変化に対して様々な角度から警鐘を鳴らした人々と、そのアプローチについて言及する。

### 2-1 産業革命とは

世界初の産業革命は、英国で1760年頃から1830年頃にかけて起こった。一言で言えば、織物を中心とする工業製品の生産が、それ以前の工場制手工業から、工場制機械工業へと大きく移行した変革のことである。機械の動力としては、水力や馬力などに加えて、蒸気機関がおおいに活用された。蒸気機関の基礎的なものは、すでに古代アレキサンドリアで発明されていたが、蒸気の圧力を効率的に利用するための改良は、18世紀の到来を待たねばならなかった。特に、スコットランド出身のジェームズ・ワットが1765年に行なった改良により、石炭の使用量が劇的に減少した。その後、この改良型蒸気機関を利用した紡績機や、力織機が次々と発明されて、生産力は何百倍にも増加した。そして、必然的に必要になった労働力は、以前から大地主に

よる「土地の囲い込み」によって農村地から都市部へと移動していた労働者達が補うことになった。彼らは、工場のみならず、炭坑や、運河の土木工事の労働にもたずさわった。

産業革命以前の織物業の中心は、羊毛の産地であるイングランド中部（コッツウォルズあたり）であったが、発明された紡績機が紡ぐ糸の生産量が羊毛の供給量をはるかに上回り、原料不足を補う為にインドや、アメリカから安い綿花が輸入されるようになったことから、貿易港のリバプールを中心にマンチェスター、ランカスターなどのイングランド北部に主役の座をゆずり渡すことになった。こうして、英国の産業革命は、着々とその成果を上げて行くことになるのであるが、その背景には当然、土壌となるべき要素が数々存在していた。しかしながら、その要素については、本誌面においては省略し、本題に取りかかることにする。

### 2-2 産業革命の効果

産業革命による機械化によって製品が大量生産されるようになると、その販路は広く海外へも広がって行った。かねてより海外に植民地を展開していたことで、市場の確保は容易であった。そして、19世紀初頭になると、世界の工業製品の、実に約四分の一が英国内で生産されるようになり、名実ともに「世界の工場」と呼ばれるようになり、大英帝国が世界に君臨した。

この大量生産の流れにうまく乗った人物の代表として、「陶器の父」、ジョサイア・ウェッジウッドを挙げよう。芸術品としての陶

芸とえば、匠の技、手仕事をイメージするのであるが、彼は、芸術性を保ちながらも、産業革命の潮流にうまく乗り、製品を手仕事に頼るよりも、機械によって大量に生産し、彼の作品がより多くの人の手に入るようにした。また彼は、飾る為の美術品としての陶器と、日常生活で使う為の食器とを区別して作成することも考えた。

ジョサイア・ウェッジウッドは、北イングランドのストーク・オン・トレント郊外、バーズレムで、1730年に生まれた。まさに、産業革命が始まる頃に青年期を迎えるという年回りであった。ストーク・オン・トレントは17世紀より陶器の町として知られており、ウェッジウッド家も代々続く陶工の家系であった。彼は、幼くして父親をなくし、すでに職人として働いていた長兄を助ける為に9才にして陶器作りの下働きを始めた。1759年、29才の時にウェッジウッド社を立ち上げた。まさに産業革命が起こらんとしているというタイミングであった。彼は、機械を導入することで大量生産への道を開いたが、全行程を機械化するのではなく、絵付けなどに手仕事の行程を残したことから、必ずしも安価な物が作れた訳ではなかった。しかし、17世紀より上流階級の間でたしなまれていた紅茶の文化に彩りを添えたという点において、彼と、彼の同業者である、(奇しくも同名の)ジョサイア・スポードの活躍は特筆すべきことだと言える。美しい器で紅茶や焼き菓子を楽しむ習慣は、19世紀半ばには、「アフタヌーン・ティー」として確立されることとなる。今なお、紅茶の消費量世界一という、紅茶好きの英国人達の文化を語る時に、彼らの活躍を抜きにすることは不可能である。

一方、産業革命の動きは、交通網にも大きな変化をもたらした。中世より、羊毛を港まで運ぶための運河が張り巡らされていたが、産業革命によって北イングランドへも更に運

河は拡張された。重い物、かさばる物を運ぶ為には、陸路が整備される以前には、水路を使う方がはるかに便利だったからである。

また、1804年には、炭坑で掘り出された石炭を運ぶために、蒸気機関車が初めて走った。これをもとにして、後にジョージ・スティーブンソン、ロバート・スティーブンソン父子が開発した蒸気機関車が、1830年に営業開始された、リバプール・マンチェスター鉄道である。旅客を乗せて走った世界初の蒸気機関車であった。この6年後には、ロンドンでも鉄道が開通した。4つの大手鉄道会社が設立されて、またたく間に全国に鉄道網が張り巡らされた。同様にして、海上でも帆船が蒸気船に取って代わられた。いずれも、限られた富裕層にしか利用できないような高運賃の乗り物であったが、人々を運ぶだけではなく、ニュースが瞬時にして津々浦々に伝えられ、田舎の新鮮な牛乳が都市部へ運ばれる等、人々の生活や、健康状態に大きなプラスの効果をもたらした。これ以前、ロンドンのような都会では、飲み水が不衛生でコレラや腸チフス等にかかる心配があった為、誰もがビールやジンなどを飲んでいて、老若男女アルコール中毒であったと言っても過言ではない。

また、陸路の旅が、徒歩か、せいぜい馬車によってしか行なえなかった時代と比べ、人々の(運賃を支払える人ということではあるが)人生における行動範囲は飛躍的に大きくなった。この頃には、商売や巡礼目的だけでなく、学問や観光目的による人々の移動も始まっていたので、またたく間に鉄道網は全国に張り巡らされて行った。現在も英国最大手の旅行会社のひとつであるトーマス・クック社の始まりとして、トーマス・クックが鉄道を利用して「パッケージ・ツアー」の基礎的なものを企画した。

また、富裕層においては、海外(主にイタリア)の芸術や文化を学ぶ目的でグランド・

ツアーというものが17世紀末に始まっていたが、産業革命がこの動きにも拍車をかけた。貴族階級や、新興の富裕層は、子弟を数ヶ月から長い場合2年程の間ヨーロッパ大陸へ送り、様々なことを学ばせた。このように旅を楽しむ人々が増えたことによって設立された、トラベラーズ・クラブという組織がある。1819年にロンドンで設立され、今も旅行愛好家の集まるクラブとなっている。入会の条件のひとつに、「これまでの人生において500マイル（約800キロ）以上の距離を旅したことのある人」というのがある。800キロといえば、東京-大阪間を往復すればクリアしてしまえる距離であるが、交通網が発達する以前には、「遠距離」とみなされていたことが伺い知れる数字として興味深いものである。余談だが、ロンドンには各種目的を異にした「紳士のクラブ」というのが、今も多数存在している。19世紀頃の設立当時から、ほんの20年ほど前まで、それらはすべて、その名の通り「女人禁制」であった。20世紀半ば頃からは、「ビジター」としてのみ女性が入れるようになったが、会員に伴われての食事等のみ許され、宿泊はさせてもらえなかった。しかしながら、昨今は、男女差別について厳しくなってきた為、現在すべてのクラブで女性会員も受け入れるようになっている。ホステスがもてなしをする、日本の高級クラブとはおもむきが違っており、むしろ「高級な同好会」といった種類の組織である。

人や物の移動は、日の出、日の入りに基づいた地方時間の不便さを人々に気付かせた。鉄道が開通した当初の時刻表は、地方時間によって構成されていたが、5分、10分単位の時差で構成された時刻表による運行では、遅延はもちろん、事故なども頻発した。そこで、ロンドン南東のグリニッジ天文台を通る子午線が英国の標準時を決める基準と定められた。子午線というのは、北極点と南極点を結ぶ線

の事である為、理論上、地球上には無数に子午線が存在する。そこで、グリニッジを通る子午線を、便宜上、本初子午線と呼ぶ。更に海外との間の出船入り船にも標準時は必要となり、1884年に、アメリカのワシントンD.C.で国際会議が行なわれ、グリニッジ標準時が世界の標準時と決められた。その時、最後まで候補に残ったのは、ダン・ブラウンの「ダヴィンチ・コード」にも出てきたパリのローズラインであった。長い歴史の中で常に英国の宿敵であったフランスの子午線が、グリニッジのライバルであったというのは象徴的であり、来年開催予定の夏期オリンピックの招致を果たしたロンドンが最後まで争ったのがパリであったことも、これら過去の出来事を彷彿させる出来事であった。

ところで、繊維産業が毛織物から綿織物中心になったことから主役の座を明け渡したコッツウォルズ地方だが、このあたりには、幸か不幸か石炭を切り出す炭坑がなかったことから鉄道が敷かれることがなく、ますます産業革命から取り残されて行った。結果として今日、「イングランドで最も美しい田舎」という名誉の称号を得るに至ったことを付け加えておく。

### 2-3 産業革命の弊害

物事には必ず陽と陰があるものだが、産業革命とて例外ではなかった。

都市部に乱立した工場や蒸気機関車から吐き出される煙による空気の汚れ、排水による河川や海の汚染、そして、何よりも嘆くべきは、神からの頂きものである英国の美しい景観が、見る見るうちに損なわれて行ったことだった。通常、冬季には湿気が多く、天気の良い日が多い英国でしばしば発生する霧と、石炭をたくことで発生する煙が合わさって、スモッグ (smoke と fog の合成語) の害がひどくなった。都市部ではマフラーで鼻と口を

覆わなければ、とても外を歩けたものではなかったという。喘息を患って亡くなる人も多く、社会問題となった。しかし、この問題は、20世紀半ばまで改善されることはなかった。そして、1952年にロンドンで1万人の人が亡くなるという「ロンドンスモッグ事件」へと発展した。これを受けて、1956年、ロンドンでは「空気浄化条例」が発令され、一般家庭において、暖房目的で石炭をたくことが禁止され、他の大都市もこれに続いた。その後、今日に至るまで、英国の暖房は、セントラル・ヒーティングが主流になっている。

産業革命による大量生産は労働力をも必要としたので、職を求めて都市部へ移動する人は後を断たなかった。しかし、より良い生活を夢見て移住をしたはずの労働者達を待ち受けていたのは、決して楽な生活ではなかった。過酷な労働、雇用者はもとより、法律からも保護されることのない過度の労働時間、それに見合わない低賃金。結果として、労働者の子供達もまた、幼い頃から仕事にかり出されるケースがほとんどであった。チャールズ・ディケンズの多くの作品中に、労働者階級の子供達の人生を見ることが出来る。

仕事で怪我をする者も多かった。特に炭坑夫は少しでも多くの石炭を切り出して日銭を稼ごうと、深く深く掘り進んで行き、常に炭坑爆発の危険に身をさらして働き続けた。英国の現代作家、ケン・フォレットが書いた小説「自由の地を求めて」に、この頃の時代背景と炭坑夫の絶望的な日常、そこから這い上がろうとした人間のドラマが、フィクションながら実に見事に描かれている。現在、中国において、炭坑爆発が大きな社会問題となっているが、新興国において過去も現在も、まさに歴史が繰り返されるのを見る思いである。

労働者達の住環境も劣悪なものであった。衛生状態がすこぶる悪く、風呂やシャワーの

設備もないのが普通で、労働者が多く住む地域には「公衆浴場」が作られていた。

つまり、産業革命による富は、王侯貴族と一部の富裕層によって独占され、労働そのものを下支えしていた労働者には、「明るい未来」というものは全くないに等しいものであった。その為、若者達の中には、真面目に働くことを拒み、精神的にすさんでしまう者も多かった。労働者の子は、労働者。階級を超えての立身出世は、まず望めない時代だった。

更に、工業製品にも注目してみよう。前項においては、大量生産の利点に光を当てたが、必ずしも良い点ばかりではなかった。大量生産される製品は、手作りの品と違い、どうしても画一的になってしまうことは避けられない。前述のウェッジウッドのように、一部の行程に手作業を残すことで、高級品、芸術品としての地位を保ち続けたものもあるが、多くは、ただ低価格な製品を大量に作るということのみ精力が注がれて、品質がどんどん低下していった。細々と中世さながらの手作りの品を作り続けていた巨匠達の作品は、あまりにも高価で、とうてい一般人の手に入るものではなくなっていた。それは、手工芸の巨匠達の生活をおびやかただけでなく、彼らの技術そのものが後世に伝えられなくなり、途絶えてしまう危機をもはらんでいた。

### 3. 世の中の変化に警鐘を鳴らした人々

最後に、これまで記述した産業革命による世の中の変化に対して、警鐘を鳴らした人々と、そのアプローチの仕方について言及する。

代表的な活動として、ロバート・ハンターら3名の人達が設立した「ナショナル・トラスト」、ウィリアム・モリスが提唱した「アーツ・アンド・クラフツ運動」、ロバート・ベーデン・パウエルが始めた「ボーイスカウト」の3例を取り上げる。

「ナショナル・トラスト」は、産業革命によって損なわれた美しい景観を何とか取り戻し、更なる乱開発にも立ち向かう為に設立された。1895年、ロンドンで弁護士をしていたロバート・ハンター、同じくロンドンで労働者の劣悪な住環境を改善する仕事に従事していた女性、オクタヴィア・ヒル、北イングランドの湖水地方の牧師、ハードウィック・ローンズリーの3人である。3人はかねてよりの知人であり、それぞれが、産業革命による乱開発で、英国の美しい景観が失われつつある事に危機感を覚えていた。そして、話し合いを重ね、「ナショナル・トラスト」を設立したのである。正式名称は、**The National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty** という。1931年にスコットランドにおいて、同様の別組織が発足したため、元祖ナショナル・トラストが管理しているのは、英国を構成している4つの国のうち、イングランド、ウェールズ、北アイルランドの3カ国である。政治から切り離された完全な「非営利団体」で、会員を募り、会費と寄付金、所有する建物や庭園などを一般公開することで得られる入場料金などが主な収入源となっている。築いた財源により、次々と土地や建物等を購入し、現在では、民間としては、英国一の不動産を所有している団体である。設立者の一人である、ローンズリー牧師が住んでいた湖水地方は、山と湖に囲まれた北イングランドの名勝である。石炭が切り出されなかったことから産業革命の魔手を逃れたコッツウォルズと違い、湖水地方には、開発の手も伸び、鉄道も網羅される場所であったが、ナショナル・トラストに先立つこと100年ほど前から、現地の人々による「鉄道反対運動」などにより、どうにか景観を死守していた。この運動には、英文学のロマン派詩人、ウィリアム・ワーズワースも一役かっていた。また、湖水地方と言えば、「ピーター

ー・ラビットのお話」で有名なピアトリクス・ポターを思い浮かべるが、彼女の父親であるルパート・ポターがローンズリー牧師の友人だったことから、彼は、いち早くナショナル・トラストの会員となっている。ルパート・ポターは、ロンドンの裕福な弁護士で、ピアトリクスはポター家の長女として1866年に、ロンドンで生まれた。彼女が17才の時、一家で夏の休暇を湖水地方で過ごした事が、ピアトリクスと湖水地方の最初の出会いとなった。この時、ピアトリクスはすっかり湖水地方に魅せられ、1905年に、初めて出版した「ピーター・ラビットのお話」が売れて、印税を手にする、即座に湖水地方の農場（ヒルトップ・ハウス）を購入し、後に完全に湖水地方へと引っ越した。その後も次々と農場や、土地を買い足していき、死後は、そのほとんどすべてをナショナル・トラストに寄贈した。

湖水地方のみならず、全国にナショナル・トラストへの賛同者は広がって行き、現在は、会員数約350万人を有し、約248,000ヘクタールの土地、約700マイルの海岸線、約200の歴史的建造物と庭園を所有している。都市部の中心を一步離れたら、そこここに「原風景」が残っている英国は、英国人のみならず、訪れる多くの人の心を癒してくれる。ナショナル・トラストに感謝である。

次に、「アーツ・アンド・クラフツ運動」について述べたい。この運動を提唱した人物、ウィリアム・モリスは、1834年にロンドン北部で生まれた。父親で同名のウィリアム・モリスは、株式の仲買人で、大変裕福であった。1847年、わずか50才にして亡くなったが、投資した銅山の株が何百倍にも膨らんだため、残された一家が生活に困る事はなかった。時代を考えれば、ウィリアム・モリスは、生まれながらにして、産業革命の恩恵を受けていたと言える。しかし、彼は、様々な形で産業革命による世の中の変化に警鐘を鳴らし続け

た。特に、「アーツ・アンド・クラフツ運動」によって、彼は、中世以来作られていた手作りの芸術を絶やさず、後世に伝えて行くことに尽力した。子供の頃から中世の建築物や、芸術品に親しんでいた彼は、オックスフォード大学に進学した後、当初勉強する予定だった神学を離れ、美術の道へと向かって行った。最初は、画家を目指したが、才能を自ら見限り、断念。卒業後は、建築事務所に勤め、建築家への道を歩み始めた。その後は、実家の豊かな経済状況を礎にして、オックスフォード時代の友人達と共にインテリア会社を始めた。人物を描くことが不得意だった彼が、その才能を花開かせたのは、壁紙やテキスタイルのデザインだった。植物や花鳥を描かせると、彼は、平面に実に豊かな立体感を与え、見る者の目にパターンの境目が分かりにくい、見事な連続性の絵柄を生み出すのであった。また、彼の会社は、手作りの家具等の販売や、建築設計の仕事も行なった。この会社は、モリス・マーシャル・フォークナー商会と名付けられ、1861年設立なので、今年ちょうど150周年に当たる。彼のデザインは、今も不動の人気を保っており、世界中のファン達の家を彩っている。産業革命による大量生産、工業製品の質の低下を常に嘆いていた彼は、常に「手作り」にこだわったので、当然のことながら、彼の会社の製品は高価格になった。結果として、彼の顧客は、裕福な人々であり、その多くが産業革命によって富を得た人々であったということは皮肉なことである。また、前出のビアトリクス・ポターの湖水地方の住まい、ヒルトップ・ハウスにもウィリアム・モリスの壁紙が貼ってある。ビアトリクス・ポターは、湖水地方の景観を守ると同時に、手作りの家具やアンティークの保護にも力を注いだので、アーツ・アンド・クラフツ運動の擁護者の一人であったと言うことができよう。モリスは、主にロンドンを拠点にして仕

事をしたが、暇さえあれば、コッツウォルズの田舎に借りていた別荘、ケルムスコット・マナーに滞在した。産業革命から切り離された田舎こそ、彼にとっての理想郷だったのである。その後、モリスは、彼の仕事や活動を通して、次第に労働者達の過酷な生活へも目を向けて行った。そして、ついに社会主義へ転向し、運動にも力を入れた。更に、これらの他にも、詩人、作家、翻訳家、染色工芸職人、印刷業、カリグラファー等、いわゆるマルチ人間として、それぞれの分野で、第一線の活躍を続けた。1896年に亡くなるまで、走り続けた。亡くなった前年が、前述のナショナル・トラスト設立の年だが、モリスは、ナショナル・トラストの活動のもとになった、古建造物保護協会やオープン・スペース協会の活動にも力を注いだので、長生きしていれば、ナショナル・トラストの中心的人物になったことは、ほぼ間違いないであろう。彼の名言のひとつに、「本当に美しいと思う物だけを家に置きなさい。」というのがある。モリスの死後100年以上たち、100円ショップでたいていの物が揃ってしまう現状を考えると、彼の問題意識は、そっくりそのまま現代社会にも適用されるものだ実感する。エコロジーに真剣に取り組まなければならない我々現代人にとって、モリスから学ばなければならないことは沢山あると思われる。

しかしながら、先ほども少々触れたように、父親の資産による生まれながらの裕福な生活、実家の資金を元手にしての会社設立、中流階級以上が彼の主な顧客であったという事実などを考慮すると、彼の人生は、産業革命の恩恵に常に預かりながら、産業革命の弊害と戦い続けたという、相反する二極性を持ったものであったと言える。

最後に、もう一人、「ボーイスカウト」運動を始めたロバート・ベーデン・パウエルについて述べたい。彼は、1857年に牧師の息子

としてロンドンで生まれた。1876年から1910年まで陸軍の軍人としてインドとアフリカで働いた。特に1899年からの第二次ボア戦争における活躍は、歴史に残るものである。この戦いの中で、南アフリカのマフェキングの町が敵軍に包囲され、守備隊長であったロバート・ベーデン・パウエルは、町の人々とともに217日間ろう城し、翌年、解放されるまで町を守り抜いた。このろう城の間に彼は、9才以上の少年達を見習兵として使い、軍事情報の収集や伝達、敵方の見張りなどを行なわせた。この経験を通して、パウエルは、幼い少年であっても、はっきりとした「役割分担」を行えば、責任を持って任務を遂行するということを認識した。かねてよりパウエルは、産業革命によって英国が繁栄している陰で、多くの労働者が過酷な生活を強いられ、彼らの労働条件の改善の見込みもほとんどないような状況から、若者達の中から輝きが消え、将来への希望を持たない為に、彼らの心がすさんでいることに大変心を痛めていた。そこで、マフェキングでの経験を生かして、1907年8月1日から8日まで、南イングランドブラウンシー島において、実験的キャンプを開催した。彼は、このキャンプに20名の少年達を招待した。このメンバーの中には、イートン校やラグビー校といった名門校に通う上流階級の子弟と、労働者階級の少年とがほぼ半々の割合で含まれていた。パウエルは、年齢や、出身階級を完全に混ぜて、これらの少年を4班に振り分け、それぞれの班（パトロールと呼ばれた）の中で、一人一人に役割を当てた。結果は大成功で、全員が班長を中心に役割を完遂した。この実験キャンプの成功によって、パウエルは、このような活動が、「将来を託す青少年の健全育成」という目的を果たすという確信を得て、「ボーイスカウト」と名付けた。キャンプ開始の日が、この運動の創立日とみなされた。

scoutという言葉は、「斥候」「偵察」という意味の軍隊用語である。1908年には、「Scouting for Boys」という本が出版され、ボーイスカウト運動は一気に広まって行った。4年前、2007年8月1日に、創立100周年の記念式典が、ブラウンシー島で行なわれた。現在では、世界216カ国の加盟国に3100万人の会員数を誇る青少年団体にまで成長している。ガールスカウトは、ロバート・ベーデン・パウエルの妹アグネスと、妻オレーブが創立し、少女は人々の心を導く存在になって欲しいとの願いをこめて、ガールガイドと名付けられたが、アメリカや日本など、ガールスカウトという名称を使用している国もある。前出のビアトリクス・ポターも、ガールガイド運動に共鳴し、湖水地方の彼女の所有地をガールガイドのキャンプ場として提供したことがある。

以上、環境問題へのアプローチとして、ナショナル・トラスト、手作り芸術の保護へのアプローチとして、アーツ・アンド・クラフツ運動、そして、人々の心の救済と青少年の健全育成へのアプローチとして、スカウト運動の3つの例を中心に、産業革命による世の中の変化に警鐘を鳴らした人々を取り上げた。アプローチの方法や、それぞれが生きた年代、場所に少々の違いはあるものの、彼らの目指す方向や思いが同じであること、その為に彼らの間に接点があった事実等も知っていただけたことと思う。

#### 4. 終わりに

今回、過去に口述した内容を文字に起こしてみても気が付いたことがある。産業革命による世の中の変化に警鐘を鳴らした人々の叫びが、そっくりそのまま現代を生きている我々の耳にも聞こえてくるということである。

本稿で記述した産業革命は、後に「第一次産業革命」という別名で呼ばれるようになり、

更なる技術革新による「第二次」、ITによる「第三次」と続いた。しかし、現在は、過去250年の間に人類がいじめ続けた我々の星、地球を滅亡の危機から救わねばならないという大きな課題にも取り組んでいる。二酸化炭素排出による地球の温暖化、それを防ぐために「よし」とされてきた原子力発電のつまずき…。今、「地球の環境に優しい」、つまり「エコロジー」をスローガンによく全世界が一丸となって、本気で考え始めているところである。環境エネルギー問題に取り組む、この変革を、「第四次産業革命」と呼ぶ向きもある。特に、日本においては、2011年3月11日の東日本大震災による原発事故で、「電力不足」に直面し、夏の猛暑を見事に節電で乗り切ったばかりである。国民の努力のたまものであろう。そして、今、太陽光発電、風力発電は、地球規模で行なわれつつある。

また、伝統工芸においても、安価で便利な製品がいくらでも手に入る現代日本で、「陶器」や「漆器」「竹細工」などの手仕事を次の世代にも伝えようと日々励んでいる人々がいる。そろそろ、我々は、安い物を購入しては、「飽きた」「こわれた」と言って、ゴミ箱に捨てる生活から、アーツ・アンド・クラフツ運動のように、本当に良いもの、美しい物を大切に使い、こわれても修理を繰り返して、子や孫にも譲り渡して行くという本物志向の生活に戻るべきであろう。

更に、「いじめ」「幼児虐待」「無差別殺人」等のいたましい事件を耳にするごとに、ベーデンパウエル夫妻が始めた「スカウト運動」を思い出す。スカウトの「約束」には、「神と国を愛し…」という文言がある。これは、日本が第二次世界大戦後、教育の現場において、どこかに置き忘れて来たことである。「神」とは、特定の宗教を指しているのではなく、個々の信仰を尊重している。ボーイスカウト100周年記念式典において、世界中か

らブラウンシー島へやって来た少年達が、国や宗教の違いという壁を超えて手を取り合い、肩を抱き合う姿をこの目で見、大変感動し、涙したことを思い出す。9.11から10年がたち、「テロとの戦い」という大義名分を掲げてきた欧米諸国が、結果として、たいした成果も得られず、更なる犠牲者を増やすのみに費やしてきたこれらの日々を思い、本当に戦うべき相手は、「自分のうちにある弱さ」であるということ、改めて確信している。本稿で取り上げた人々が人生をかけて成し遂げようとしたこと、その活動や思いを、我々も自分達のこととして真摯に受け止め、次の世代にも伝えて行くことが、現代を生きる我々に課せられた命題であるというメッセージをもって、この研究レポートを締めくくりたい。

#### 参考文献

- [1] ENGLAND: A Concise History (1980) F.E.HALLIDAY
- [2] National Trust 本部発行資料
- [3] 英国ナショナル・トラスト紀行 (2006) 小野まり
- [4] William Morris (1990) Helen Dore
- [5] ウィリアム・モリス＝ラディカルデザインの思想 (1973) 小野二郎
- [6] 図説ウィリアム・モリス (2008) ダーリング・ブルース&常田益代
- [7] ウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ (2009) 藤田治彦
- [8] ボーイスカウト世界連盟本部発行資料
- [9] Scouting for Boys (1908) Robert Baden-Powell
- [10] The Story of Wedgwood (1962) Kelly. A